



編集後記

Editor's Postscript

鈴木 晃志郎（地域生活学研究会）

SUZUKI Koshiro, Ph.D. *JIRCL, Chief Editor*

地域生活学研究会は『地域生活学研究』第12号をここに刊行した。昨年、わずか1報と低調だった掲載数も、今号は投稿論文4、うち掲載3報と例年並みの水準を回復した。

弊誌は J-Stage や機関リポジトリを無償のデータ保管庫として活用し、電子ジャーナルを主、冊子体を従と位置づけて刊行されている。冊子体はあくまで、国立国会図書館への納本を通じた ISSN の書誌データ更新や、県内の公共図書館および大学附属図書館への献本など、ごく限られた目的のため、個人研究費の一部で私的に作成しているに過ぎない。昨年号と本年号を合冊して刊行するのは、冊子体があくまでサブの位置づけにあり、一般的な学術刊行物に比して遥かにたやすく体裁を変更できる弊誌特有の事情によっている。

掲載された2篇の論文は、北海道南西沖地震の被害を受けた奥尻島の青苗言代主神社例祭の被災前後の祭礼景観を、GISを用いた「記憶地図」の作成によって可視化し、災害以前の祭礼を後世に向けてアーカイブすることの有効性と意義を検討した蟬塚咲衣『「記憶地図」を用いた奥尻島青苗言代主神社例祭における災害伝承のあり方』、発電施設に着目して、第二次世界大戦以後の富山県内における発電施設の立地展開過程の特徴とその原因や背景を明らかにし、そこから見出される地域的傾向について考察した龍瀧治宏『戦後の富山県における発電施設の立地展開過程と地域的傾向』の2報であり、これに加え報告論文として、廃坑となった福島県の伊達永井鉱山の鉱石を、地域の小学

校高学年児童を対象にした灰重石分離の授業実践に用いる平川尚毅ほか3名の『地域の廃鉱となった鉱山を教育資源として活かす試み：伊達永井鉱山の鉱石から灰重石を取り出す授業実践を通して』の1報を得た。

3報のうち、蟬塚論文の著者は修士課程の大学院生であり、龍瀧論文の著者は県内の学校教諭である。また平川ほかの報文は学校教諭やNPO関係者らが共著者として名を連ねており、いずれも大学に所属する狭い意味での学者ではない。掲載数こそ低空飛行を続けてはいるが、学会誌に論文投稿する機会が限られてしまう人々の意欲的な研究成果を公表する媒体として選ばれ続けているのは光栄の至りというほかない。

一研究機関の労働者にすぎない我々にできることは限られている。折から研究環境の悪化が進んで久しい昨今、この雑誌もいつまで刊行し続けられるのか未知数である。いや、先のことを考えるのは止そう。新年度も引き続き、手許のささやかな実践を通じて学術出版における機会の平等と公正を実現すべく、この小さな篝火を絶やさずにおこう。

(2022. 02. 16)